

ブックガイド

No. 16 2015. 11. 11

■過去の災害

『古地図が語る大災害 絵図・瓦版で読み解く大地震・津波・大火の記憶』

本渡 章／著 創元社 2014. 12 216/柿14Z/

土地の来歴や、過去の災害による被害の規模など、古地図が教えてくれることは少なくありません。古地図以外にも絵図や瓦版、石碑、仮名草子などを取り上げて、災害の記憶がどのように伝えられてきたか、今後どのように継承していくかにも言及しています。大阪を中心に取上げている本書ですが、これらは関西地方に限った話ではありません。文中に何度も出てくる、大災害の前では都道府県の境界はないに等しい、という言葉の重みを感じます。

■文学・体験記

『暗い夜、星を数えて 3・11 被災鉄道からの脱出』

彩瀬まる／著 新潮社 2012. 2 LS916/A7/1

いま作家として活躍する彩瀬まるさんのルポルタージュです。震災当日、彼女は一人旅の途中、JR 常磐線新地駅の列車内で被災しました。津波から間一髪で逃れたものの、極度の不安と恐怖に苛まれる数日を南相馬で過ごします。当時の凄惨な体験を克明に書き起こした第一章は、時が経つほどに貴重な記録となるでしょう。福島で生きる人々の苦しみと強さ、それに対峙する自らのもがきが、当事者であり旅行者でもある特有の視点から描かれています。

『方言を伝える 3. 11 東日本大震災被災地における取り組み』

大野真男・小林隆／編 ひつじ書房 2015. 5 818. 2/柿155

震災後、「負けねど！飯舘」「がんばっぺ いわき」など、方言は被災者を励まし復興への意欲を高める言葉として各地で活用されています。本書は、言語研究者たちが、被災地域の方言を活性化して次の世代に伝えることを通して復興を支援していこうとする取り組みの研究報告です。学習教材の作成など具体的な手法を紹介しています。方言を継承する難しさを知ると同時に、方言の意義とその力について学ぶことができる一冊です。

■各組織の震災対応

『企業と震災 結び目が生んだ25のストーリー』

日本財団／編 木楽舎 2012. 11 335. 21/柿12Y/

阪神・淡路大震災以降、ボランティアが定着したように、東日本大震災後に目立った活動として企業による支援が挙げられます。本業を活かした「被災地・被災者支援」は、自治体の活動では困難な成果を発揮しました。本書では、従来の社会貢献、イメージの向上を目的とした活動とは異なる企業による東日本大震災後の支援の様子と、背景となる社会の状況について紹介しています。

■復興 防災

『知っておきたい防災新常識大事典』

災害前から災害後まで今年の災害に備える最新防災メソッド&グッズ』

国崎 信江／監修 洋泉社 2015.1 369.3/㍻/151/

災害が起こったとき、私たちはどうすればいいのか。また、普段からどのように備えていけばいいのかを本書では災害のケースごとに、「知っておきたい防災新常識」と「知っておきたい最新防災学」の二つの項目から解説しています。カラーページを多く使ったの最新防災グッズ紹介もあり、その製品の特徴はもちろん、定価、発売元等細かな情報まで載っています。自分がいつ巻き込まれるかわからない災害に対して、具体的にまずどうすべきかを考えるとき、最適の一冊です。

『原発避難者の声を聞く 復興政策の何が問題か』

山本薫子・高木竜輔・佐藤彰彦・山下祐介/著 岩波書店 2015.6 369.36/㍻/156

原発事故により強制避難となった富岡町の方たちの生の声が綴られています。長期化する避難生活で将来の見通しが立たず、4年過ぎても不安な状況に変わりありません。避難先で生活再建をするべきか、復興の道が示されれば避難元へ還るのか。健康への影響を心配する若い世代、避難者同士や避難先での軋轢など、問題は複雑化しています。そんな声をすくいあげ、避難者の現状に寄り添った具体的な復興案を示していきます。

■こども向け

『あきらめないことにしたの』

堀米薫/著 新日本出版社 2015.6 LS612.1/H2/1

書名でもある「あきらめないことにしたの」という言葉は、この本の主人公である渡邊とみ子さんが書いた詩の題名です。どこにでもいる農家のお嫁さんだった彼女は、東電福島第一原発事故により故郷・飯舘村を追われ、精魂込めて育てた野菜たちも危機に晒されます。そんな未曾有の困難の中で彼女を助けてくれたのは、福島の人々の「結」の力、そして作物たちの放つ生命の輝きでした。土に向き合って生きる人間の強さをひしひしと感じられる一冊です。

■その他のジャンル

『フクシマの後で 破局・技術・民主主義』

ジャン＝リュック・ナンシー/著 渡名喜庸哲/訳 以文社 2012.11 135.5/㍻/12Y

著者は、ある破局に対し全体が影響を受けてしまう、現代文明の相互依存の複雑さを強調しています。国際的な視点から考えるとき、「フクシマ」はどのような意味を持つのでしょうか。フランスの哲学者が「フクシマの後で哲学すること」を試みている本書は、自然災害がいまや文明的な災害となる現実に対して、文明・技術・民主主義を再考することの可能性を示唆しています。